

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う発達障害児者への影響 I

—当事者向けアンケート結果より—

企画・情報部 発達障害情報・支援センター 与那城郁子 赤塚望 林克也 加藤潔
島山和也 西山秀樹 中澤将人 田中優輝 矢野美穂 進藤玲子 西牧謙吾

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、＜新しい生活様式＞の実践がすすめられる中、発達障害児者がどのような困りや生活の変化等を感じているのか捉えるためには実際の当事者の声が重要であることから、当事者向けアンケート調査を実施した。

発達障害児者を調査対象とし、令和2年7月2日～8月17日にかけてWEBアンケートを実施した。調査内容は、「Ⅰ. ＜新しい生活様式＞の実践に伴う生活の変化や困り感等に関すること」、「Ⅱ. 最近の状態とこれからの生活に関すること」とし、合計10問を設定した。回答の送信をもって調査協力に同意したものとみなし、その旨をアンケートフォームに記載した。アンケートフォームでは個々の回答者の特定はできず、全体の集計結果とすることで個人情報保護した。回答件数は852件で、回答者の約6割が女性であり、診断名別ではASDとAD/HDが多かった。

＜新しい生活様式＞に取り組む中での日常生活上の困りについては、マスクを外すタイミングの難しさや、ネットでの手続き／買い物での困り感を感じている人が多かった。

マスク着用については「がまんをして着用している」(50%)、「マスクをすることが難しい」(6%)と半数以上が何らかの困難を感じており、その理由については感覚過敏に由来するものが主であった。マスク着用時の状況については「(聞き取りにくい時)相手に聞き返すことが難しい」(41%)「普段より言われたことを理解するのに時間がかかる」(40%)と、コミュニケーションの難しさが生じていることがうかがわれた。対面のオンライン化については「どのタイミングで発言すればよいのか、よくわからなくて戸惑う」(46%)、「相手の話に集中しにくい(画面に映っている物が気になってしまう等)」(29%)であった。

最近(この1～2週間)の自身の状態については、何らかの不調が増したと回答した方が多く(「睡眠の問題が増えた」(43%)、「怒りっぽくなった／気分の浮き沈みが大きくなった」(42%)、「お金に関する心配ごとが増えた」(41%))、これからの生活に関する状態や気持ちとして多かったのは「いつまでこの状態(コロナを気かけながらの生活)が続くのかとても不安／気持ちが落ち込む」(62%)、「将来の生活についてあまり希望がもてない」(48%)等、不安を感じている人が多いことがわかった。

今回のアンケートを通じて、多くの発達障害児者が日常生活で様々な影響を受けていることが示された。感覚過敏等による問題を抱えている場合も多く、周囲への理解啓発に向けた取組の必要性も示唆された。一方、自由記述では、外出や他者と接する機会の減少によって身体的・精神的負担が軽減したという声や、オンライン化に伴い新たなスキルを習得できたなど、＜新しい生活様式＞による何らかのメリットを捉えた回答も一定数みられたことは重要なポイントであると考えられた。今後は、当センターとして取り組むべき情報発信内容等に関する検討を行い、当事者や支援者により有用な情報発信につなげたい。※本発表において、開示すべき利益相反はない。